



Gender Differences of Dietary Self-management Behavior Affecting Control Indices in Type II Diabetes

Taru, Chiemi

(Degree)

博士 (保健学)

(Date of Degree)

2008-03-25

(Date of Publication)

2011-12-19

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4228

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004228>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 多留 ちえみ
博士の専攻分野の名称 博士（保健学）
学 位 記 番 号 博い第 51 号
学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付 平成 20 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

Gender Differences of Dietary Self-management Behavior Affecting Control Indices in Type II Diabetes（性差による 2 型糖尿病のコントロール指標に影響する食事自己管理行動）

審 査 委 員

主 査 教 授 宇佐美 眞
教 授 傳 秋 光
教 授 石川 雄一

論文内容の要旨

専攻領域 医学系研究科保健学専攻 看護学領域
 専攻分野 基礎看護学（成人看護学）分野
 学籍番号 031M507M 多留ちえみ

論文題目：

Gender Differences of Dietary Self-management Behavior Affecting Control Indices in Type II Diabetes.

(和訳：性差による2型糖尿病のコントロール指標に影響する食事自己管理行動)

糖尿病患者の食事に関する療養支援においては、「いつ」「どこで」「どのような状況」での「どのような行動」が食事摂取量の減少あるいは増加に関連しているのかを的確に評価し、具体的な自己管理行動を提示していくことが必要であると考えられる。しかし、食事療法に関する研究は栄養学的な食品選択および摂取量などの定量評価が中心であり、自己管理行動を評価できるものはなかった。そこで、筆者らは、これまでに食事自己管理行動を量的に評価するために、【栄養指導内容遵守の工夫】と【食事療法妨害要因への対処行動】の2領域からなる食事自己管理行動質問紙(Dietary Self-management Behavior Questionnaire: 以下DSBQとする)を開発した。

本研究では、2型糖尿病のコントロールに影響する自己管理行動について、患者170名(男性93名、女性77名)を対象にして、DSBQを用いた調査結果をもとに重回帰分析を用い、有意(5%以下)の標準偏回帰係数を得られた項目により要因を解析した。

(1) 血糖および体重のコントロールに関連する食事摂取量およびその他の要因

男性では、BMIとは、標準体重1kgあたりの1日摂取エネルギー量(kcal/kgSBW, 以下省略)と正の、1日の歩数、安静時消費エネルギー量と負の関連を、腹囲とは、総摂取エネルギー量、脂質摂取量と正の、活動時間、安静時エネルギー消費量と負の、HbA_{1c}とは、炭水化物摂取量、インスリン注射と正の関連を認めた。

女性では、BMIおよび腹囲共に、炭水化物摂取量と正の、安静時エネルギー消費量、1日歩数と負の関連を認め、HbA_{1c}は、インスリン注射とインスリン分泌促進薬服用患者ほど高値であり、食事摂取量との関連は認められなかった。

(2) コントロール指標に関連が認められた食事摂取量に関連する食事自己管理行動

男性では、「バランスよくおいしく食べる工夫」と総摂取量と脂質摂取量が負の、「食べないで我慢する努力」と総摂取量が負の、「摂取量を決めて食べる工夫」と炭水化物摂取量が負に関連していた。一方、「夕食摂取の所要時間」が長いほど、総摂取量および脂質摂取量が増加することが明らかになった。

女性では、「塩分制限の工夫」と「過食を重ねない」行動の頻度が高いほど、炭水化物摂取量が減少し、「他の価値観を優先して食べる」と「間食の頻度」が高いほど、炭水化物摂取量が増加していた。

以上、2型糖尿病のコントロール指標(腹囲、BMI、HbA_{1c})に影響する食事自己管理行動には、性別によって異なる特徴的な所見が認められ、性差による今回の所見を考慮した教育的支援が糖尿病のコントロール改善に役立つことが期待される。今後は背景要因を含め、縦断的調査による検討を重ねていくことが課題として残されている。

指導教員 宇佐美 眞 教授

論文審査の結果の要旨

氏名	基礎看護学（成人看護学）分野 学籍番号：031M507M 多留ちえみ		
論文題目	Gender Differences of Dietary Self-management Behavior Affecting Control Indices in Type II Diabetes. (和訳：性差による2型糖尿病のコントロール指標に影響する食事自己管理行動)		
審査委員	区分	職名	氏名
	主査		
	副査		
	副査		
	副査		

要旨

糖尿病患者の食事に関する療養行動支援においては、「いつ」「どこで」「どのような状況」での「どのような行動」が食事摂取量の減少あるいは増加に関連しているのかを的確に評価し、修正が必要な行動については、具体的な行動を提示していくことが必要であると考えられる。しかしながら、食事療法に関する研究は、栄養学的な食品選択および摂取量などの定量評価に関する研究が中心であり、患者が行っている行動を評価できるものはなかった。そこで、筆者らは、これまでに食事自己管理行動を量的に評価するために、【栄養指導内容遵守の工夫】と【食事療法妨害要因への対処行動】の2領域からなる食事自己管理行動質問紙(Dietary Self-management Behavior Questionnaire: 以下DSBQとする)を開発した。

本研究では、2型糖尿病のコントロール指標の改善に有効な具体的な自己管理行動を提案するために患者170名(男性93名、女性77名)を対象に筆者らが開発したDSBQを用いた調査を行い、以下の結果を得た。なお、分析には重回帰分析を用い、有意水準を5%とした。

(1) 血糖および体重のコントロールに関連する食事摂取量およびその他の要因

男性では、標準体重1kgあたりの1日の摂取量(kgSBW, 以下省略)が多いほどBMIが大きく、1日の歩数が多いほど、安静時消費エネルギー量が高いほどBMIが低く、腹囲は、総摂取エネルギー量が多いほど、脂質摂取量が多いほど、そして活動時間が少ないほど、また安静時エネルギー消費量が少ないほど大きかった。HbA_{1c}は、炭水化物摂取量が多いほど、インスリン注射治療を行なっている人ほど高かった。

女性では、BMIおよび腹囲共に、炭水化物摂取量が多いほど、安静時エネルギー消費量が低く、1日の歩数が少ないほど大きかった。HbA_{1c}については、インスリン注射を行っている患者ほど、インスリン分泌促進薬を服用している患者ほど高値であり、食事摂取量との関連は認められなかった。

(2) コントロール指標に関連が認められた食事摂取量に関連する食事自己管理行動

男性では、「バランスよくおいしく食べる工夫」を行う頻度が高いほど、総摂取量と脂質摂取量が減少し、「食べないで我慢する努力」を行う頻度が高いほど、総摂取量が減少し、「摂取量を決めて食べる工夫」をする頻度が高いほど、炭水化物摂取量の減少に関連していた。一方、「夕食摂取の所要時間」が長いほど、総摂取量および脂質摂取量が増加することが明らかになった。

女性では、「塩分制限の工夫」と「過食を重ねない」という行動の頻度が高いほど、炭水化物摂取量が減少し、「他の価値観を優先して食べる」という行動の頻度と「間食の頻度」が高いほど、炭水化物摂取量が増加していた。

以上、2型糖尿病のコントロール指標(腹囲、BMI、HbA_{1c})に影響する食事自己管理行動には、性別によって異なる特徴的な所見が認められ、性差による今回の所見を考慮した教育的支援が糖尿病のコントロール改善に役立つことが期待される。今後は背景要因を含め、縦断的調査による検討を重ねていくことが課題として残されている。

掲載予定号 Kobe Journal of Medical Sciences 54 (1) 2008

Dr. Chie Miyama, M.S. (Nursing) of Graduate School of Health Sciences, Kobe University
 多留ちえみ